

つつじヶ丘学園みたけ寮に おけるクラスターについて

「大事な人を守るってことは、まず自分をまもること、だから自分を大事にしてください」

あるアーティストの言葉から

「ちゃんとすれば大丈夫」

勤務した担当看護師の言葉から

社会福祉法人広済会 クラスター検証委員会



みたけ寮の概要



- 定員：男性20名 女性10名
- 障害支援区分：平均 5.6
- 強度行動障害者 13名

- 支援員：17名
（男性8名、女性9名）
- 看護師：1名

発生時の対応：初期対応の遅れについて

- 利用者さんは発熱していたが、職員の体調不良もなくまさか新型コロナウイルスとは思えなかった。
- 抗原検査の通院時も職員は防護服の着用はなく、「まさかの対応」ができなかった。その間に職員への感染が広まった恐れもある。

ゾーニングについて

- 感染状況によって随時変更になった。
- その都度、発熱している利用者さんに移動していただき、負担をかけてしまった。

- 想定していた、ゾーニングはあくまで想定に過ぎなかった。
- 状況により刻々と変わっていくものだと認識しておくことが必要。
- 臨機応変な対応が求められる。



発熱者が出たとき用の静養室
園庭に設置

今回のクラスターでも使用
グリーンゾーンになったり、レッド
ゾーンになったり…

行政対応について 指揮官（施設長）の立場から

- 県障害政策課、保健福祉事務所など親身になり対応していただき感謝の気持ちです。
- 書類の原本作成にとっても時間が掛かった。
- 毎日メールでの報告が必要であり、連続出勤する必要があった。
（代替職員の手配ができなかった）
- 看護サマリーや利用者情報などの一元管理をしておく必要性を感じた。

職員の応援体制について

- 法人内の応援体制

事前のリストアップはしていたが、発生初期から応援に入れなかったことは大きな反省点である。

応援に入る職員もいろいろな気持ちを抱えていた、家族のことや恐怖心もあったと思う。

応援体制が入り、みたけ寮の勤務体制が整うまで1週間要し、現場職員はその間は激務だった。

体制も整い、指揮命令系統がとれ、寮内の統率が取れるようになった。

みたけ寮と法人をリモートでつなぎリアルタイムでの情報発信と情報共有を図る。

応援体制勤務状況について

通常との比較

	職員総数	早出	日勤	遅出	夜勤者
通常時	17名	1名	4名	1名	2名
コロナ対応時 応援無し	8名	1名	1名	1名	2名
応援体制時	15名	2名	3名	なし	2名

応援が入り勤務が落ち着いてからは
みたけ寮職員には、夜勤→明け→休み→日勤（含早出）を基本とし夜勤明けの翌日は休日に。
なるべく負担がないように配慮。応援職員はその間の早出と日勤に入る。
それでも夜勤者の数が限られ綱渡りの状態には変わりなかった。

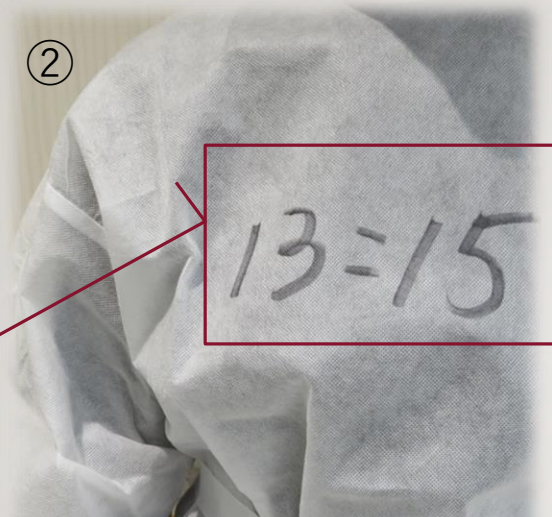
職員へのフォローについて

精神的なフォローとして

- お互いに声をかけあい、励ましあい業務に取り組んだ。特に体調面への配慮としてガウンにマジックで支援に入った時間を記入しお互いに1時間～1.5時間程度で1回の休憩を取れるように声をかけあった。
- 後方支援の職員には、陽性でホテル療養職員へ様子伺いの電話を入れてもらい、陽性職員のフォローもした。
- ガウン着用時の暑さが体力消耗に繋がり過酷だった。



防護服前後に時間を記入



グリーンゾーンとして設営されたテント。



初期の防護服 足首まで覆い、安心感があったが着脱が難しいため着用しないように指示が出た。

看護師の立場から

- ガウンテクニックの指示
- 「ちゃんとしていれば大丈夫だから」の声掛けで落ち着いて支援に入れた

みたけ寮現場職員の立場から

- 家族と同居しながら勤務を続けた職員から
- 車中泊を経験した職員からメンタルについて
- 自主隔離用ホテルを手配した職員から
- 女子職員が半減した中でのタイトな勤務状況について

応援職員の立場から

- みたけ寮での勤務経験が無い立場で、応援に入った職員から
- 家族と離れて応援に入った職員から

陽性になってしまった職員から

- 陽性になり、自分自身が大変な状況でも利用者さんを心配する声が聞かれた。
- 申し訳ないと謝罪する職員も。

思ってもみなかったこと ①ゴミ処理問題と野良猫

- とにかくたくさんたくさんゴミが毎日毎日出ました。通常ゴミ処理は、清掃センターへ持ち込んでいた。今回のゴミ処理について関係各所へ問い合わせをしたが、最終的な回答はどこからももらえなかった。

新里支所→保健所→清掃センター→専門業者→保健所→??????

- ゴミ置き場も問題になり、園庭に出していた残飯などはすぐに野良猫に荒らされてしまい処理に困ることになってしまった。仮設のごみ置き場の手配もお盆時期ですぐに対応できず。知り合いの方から、使用していない物置を借り受けて保管することになった。

思ってもみなかったこと ②衛生問題

- トイレについて

みたけ寮と同じ建屋にもう1つの障害者支援施設（つつじヶ丘はなぞの）があり、そちらの職員とみたけ寮職員は共用のトイレだった。はなぞのへの飛び火だけは絶対に防ぎたかったため、みたけ寮内で支援にあたる職員は共用トイレの利用はしないことになり、寮内で利用者トイレを利用することにしていた。が、やはり利用者さん（陽性者）とは別にした方が良いという判断から、簡易トイレを園庭に設置する方向になった。

しかしお盆時期と重なり、どこの業者さんにも対応してもらえず、近隣の建設会社さんのものを一時的に借り受け使用することに。ただ1基しか借りられなかったので男女共用となり特に女性職員は使いづらかった。

思ってもみなかったこと ③連絡手段

- みたけ寮の構造上、寮内（レッドゾーン）に内線電話がなく、すぐに連絡を取ることが難しかった。その為、寮内用として携帯電話を購入してもらった。みたけ寮内だけで使用するためだけわすか数週間だが用意し、連絡手段の確保ができた。
- ゾーニングの際に、連絡手段のことまでは考えていなかった。

法人・関係機関に感謝

- 職員用にホテルを手配していただき、家族への感染の心配がなくなり、安心して支援に入ることができたことへ全員が感謝の気持ち。快適な環境を用意していただいたが、やはり家族と離れて暮らすことへのストレスをみんな抱えていた。
- 県内の法人さんからお見舞いをいただき感謝
- 県社協、県障害政策課、保健福祉事務所、消防関係、沢山の方々にご協力、ご心配をいただいた。

利用者さんの後遺症について


- 利用者さんの後遺症として、訴えることができない方がほとんど。
食欲が落ちていた方たちは、味覚や嗅覚障害が出ていたのかもしれない。
食事を残す方も多く、味の濃いものが好まれた。
あまりにも食欲が落ちてしまった方にはご家族にご協力いただき、差し入れをしていただいたり、個別に嗜好品を用意したり。

みんないろいろな気持ちを抱えて必死だった

- アンケートを実施して職員のいろいろな立場からの気持ちが見えてきた。
実際に応援に入った職員の気持ち、後方支援で応援を出した側の気持ち。
入った職員も、その穴埋めをする残った職員もみんな大変な気持ちを抱えて日々の業務をこなしていた。
また、法人内で一部感染症に対する温度差があった事も事実。
- 利用者さんがマスクができない中咳をかけられても、よだれをたらされても体を寄せて支援しなければならないことへの葛藤があった。

最後に…

～やっぱり人の力～

-
- 今回のクラスターでは、入院者6名で、重篤者もなく全員が快方にむかうことができた。
 - 隣接する施設や、法人内他事業所へ感染が飛び火することが無かった。
 - 応援に入った職員、みたけ寮現場職員陰性者は最後まで感染することなく支援を続けることができた。
 - クラスターは時期を選ばない。年末年始やゴールデンウィークだったら？
 - 状況に応じ臨機応変に対応しながらも、常に利用者さんに寄り添い、回復を願い支援し続けられた。
 - クラスターを収束できたのは紛れもなくマンパワー！！
- 

ご清聴
ありがとうございました

